

離島及び僻地の小さな学校から始める平和教育 A Study on the Peace Educations Which Are Begun at Small Schools in Remote Islands and Places

橋本健夫*, 山口剛史**, 全 炳徳*

HASHIMOTO Tateo*, YAMAGUCHI Takeshi**, JUN Byungdug*

*長崎大学教育学部, **琉球大学教育学部

*Faculty of Education, Nagasaki University,

**Faculty of Education, University of the Ryukus

1. はじめに

第二次世界大戦は、日本の各地に多くの惨状を残して敗戦となった。戦後の教育は民主及び平和国家の建設に貢献できる国民の育成を期して始まった。多くの企業で定年を迎えようとしている団塊の世代と呼ばれる人々は、この日本で初めての民主主義教育の洗礼を受けて育ったのである。当時の若い教員たちは、子どもたちに他人と争うことのむなしさと手をつなぐ大切さを伝えようと意気に燃えて教育にあたった。運動会での一等賞のノートは、参加賞としての鉛筆として全員の子どもたちに配られた。また、「卒業アルバムはお前達の手で作って価値あるものになる」と子どもたちを励まし、手作りのアルバムを完成させた。この稚拙なアルバムが年月を経てほろほろになりながらも著者の手許にある。この一冊がそれ以降の著者の行動に与えた影響は大きいものがあった。分からなくても全員で話し合い、知恵の出すことの大切さや納得しないまでも全員で決めたことの実現に全力を傾けるひたむきさを体得していったのは、このような熱意ある教員とそれを育んだ社会ではなかつたらうか。

さて、敗戦から60年を経た今、社会は大きく変わろうとしている。当時は予想だにできなかった少子高齢社会の出現、或いは一瞬のうちに情報が世界を駆け巡るIT社会の誕生、そして、豊かな経済力に裏付けられた大量消費生活様式の浸透など価値観の多様化という一言では表現できない複雑な社会が子どもたちを取り巻くようになった。学校教育もその影響を受け、幅広く深刻な問題を抱えるようになった。また、「勝ち組、負け組」の言葉に代表されるように、子どもたちにも学習意欲一つを取り上げても格差が見られるようになってきている。この見方や考え方が定着する前に、個々の相互理解の精神の大切さを子どもたちが認識し、共生に向けての動きを活性化させることが重要である。そのためには、平和教育の一層の充実を図らなければならない。

2. 平和教育の新たな視点の必要性

戦後60年を経た長崎、沖縄では平和への願いを込めた数々の式典や行事が行われた。学校教育に於いても平和教育は継続して行われている。例えば、長崎では8月9日を中心として各小・中学校で子どもたちの平和集会や灯ろう流しなどを通して平和を願う気持ちを新たにしている。また、修学旅行生の多くは原爆資料館や平和公園を訪れたり、語り部の人たちの話に耳を傾けている。そして、「戦争はいけない」、「平和が大切」と

の気持ちを表して長崎を後にしている。

しかし、学校に於いていじめが横行し、かつそれらが陰湿化している。幼い子らを犠牲にする事件も後を絶たない。自分の欲求のために友人を傷つけたり、窮地に追いやりたりする児童・生徒も少なくない。小、中学校の教員は、これらの対処に大わらわである。この状況は何に起因するのであろうか。「社会が変わった」のはもちろんであるが、一人一人の尊厳を認め共生を図るという平和教育の原点がうつろになっているのではないかとの危惧を抱いている。豊かな生活を送っている子どもたちに戦争の恐ろしさや原爆の悲惨さを確実に伝え、平和希求の精神を育むためには、どのような平和教育でなければならないのだろうか。戦後続けてきた平和教育が一つの曲がり角に来ている。

このための一つの切り口は、戦時における一般の人々の暮らしや気持ちに焦点を当て直して戦争を語ることではないだろうか。従来は、如何に大きな被害を受けたか、如何に悲惨な状況になったかに焦点を置きすぎ、戦時における一人の人間としての心の痛みや葛藤が伝わりにくかったのではないだろうか。心から心へ伝える、この強調がこれからの平和教育に最も大切なことではなかろうか。

3. 三大学連携事業としての平和教育

平成17年度から18年度にかけて琉球大学と鹿児島大学、そして長崎大学の三教育学部が連携して、離島や僻地の学校教育の充実に向けた研究を行うことになった。県民が地上戦に巻き込まれ大きな被害を受けた沖縄県、特攻隊の出撃基地として国を守る信念の発露となった鹿児島県、そして、原子爆弾の洗礼と後遺症で苦しんだ長崎県、それぞれに第二次世界大戦の爪痕が生々しく残っている。これらを教材として平和教育の充実に寄与する研究を連帯して進めたいと考えた。この基本精神は、「心から心への平和教育」の構築である。そして、本研究を進めるにあたっては、次のような大まかな方針をたてた。

- ① 頭で理解するのではなく、子どもたちが活動する中で平和の大切さを心から感じる平和教育の模索
- ② 都市部にのみ注目するのではなく、離島や僻地での人々の暮らしから学ぶ平和教育の創造
- ③ 全国各地から利用できる IT 機器を利用した教材の作成

研究は緒についたばかりであるが、上述の方針に沿って現在の進捗状況を簡単に報告する。

4. 体験活動から生まれる平和希求の心

子どもたちが自主的に進める平和教育のあり方を追究するために、現在どのような学習が行われているかを調べ、分析したいと考えた。三県を調査対象にすることは時間的に無理があったために、まず長崎県での実践の調査に取り掛かっている。この中で、今後の平和教育の充実に必要な示唆を与えると考えられるのは、長崎市の城山小学校の取り組みである。ここでの実践はホームページ等でも紹介されているが、要点を述べたい。城山小学校は、原爆で焼け野原になった長崎の町の中にポツンと残った校舎が平和教育のシンボルとなり、学校挙げて平和教育に取り組んでいる。校内には、多くの被爆ゆかりの品々があり、公開されているため全国からの視察が絶えない学校でもある。平和学習は、総合的な学習の時間を使って年間を通して組まれており、内容的にも充実したも

のになっている。この中で特徴的なものは、児童によるピースナビ活動である。

ピースナビ活動は、3年生からの平和学習をもとに6年生が訪れた方々（市民、修学旅行で訪れた児童・生徒）に校内の被爆施設等の案内をする活動である。様々な被爆ゆかりの品々が展示されている被爆校舎はもちろんのこと、被爆したオニザンショウの樹木や被爆死した子どもを偲んで植えられた桜などの由来を説明するのである。被爆を身近に感じなければ伝えられないため、子どもたちは必死で説明の由来を学習する。この過程で彼らは、平和の尊さを感じ伝えていくのである。

この試みは非常にユニークで効果的であると思う。ただ、本研究の視点から言えば、もう少し個人に焦点を合わせても良いのではないかと考えている。城山小学校には、説明する児童らと同じ年代の子どもたちの遺品やお話も残されている。この部分を取り上げ、児童たちが共感を持って説明することができるならば、来訪者に彼らの心を伝えることができるのではないだろうか。

例えば、嘉代子桜の場合、被爆して校庭の中で亡くなっていく嘉代子さんご両親の心の交流を説明することができればと考えるのである。また、平和の少年像の台座の文字を書いたたえ子さん、家族が亡くなる中で強く生きたたえ子さんの心が浮かびあがれば、より強く平和を求める気持ちが生まれるのではないかと考えている。我々は、同じ年代との交流によって心動かされることが多い。それは共に生きたという土台を感じるからである。この点から、平和教育を語り直すのも一つの鍵かもしれないと考え始めている。

5. 離島や僻地での人々の歴史から学ぶ平和教育

5.1 沖縄県における平和教育の素材とその特徴

ここでは沖縄県の平和教育の状況について概観し、離島地域の平和教育の素材といくつかの実践について検討する。

沖縄県は前述されたように、アジア・太平洋戦争末期、多くの県民を巻き込んだ地上戦闘が行われた県である。そのため、平和教育として「沖縄戦学習」が長年にわたってとりくまれてきた。子どもたちと、「沖縄戦」という自分たちの地域の戦争、あの時多くの県民はどのような犠牲を強いられたのか、自分たちと同じ児童・生徒はどうなってしまったのかを学ぶことで、「戦争の本質」「軍隊の本質」を子どもたちに考えさせることを大事にとりくまれてきた。これらの学習を通じて、現在も沖縄県内に広がる軍事基地の存在意味や、世界各地で続く戦争・紛争にも関心を持つことも目指していると言える。

具体的には、6月23日の慰霊の日を節目として、各学校において「特設授業」がとりくまれてきた。6月23日は、沖縄戦当時日本軍の32軍の司令官（沖縄方面作戦の最高司令官）の自決の日（この日には、22日という説もある）とされ、組織的戦闘が終わったとされている日である。この日が沖縄県の慰霊祭となっていることから、学校においてもこの月が、沖縄戦を学習する月として設定されている。これまで多くとりくまれてきた内容には、戦争体験者の聞き取り（講演会）、映画の上映会（ドキュメント沖縄戦、対馬丸、かんからさんしん等の作品）、平和集会の開催などの全校あげてのとりくみがある。また、図書館などを通じての写真展・読書推進などのとりくみ、社会科や学活での授業やクラス討論などがとりくまれてきた。また学習の手法として、平和博物館の見学・戦争遺跡のフィールドワーク、とりわけガマ（沖縄の方言で自然洞窟のこと）に入

り、沖縄戦当時の状況を追体験することが重要視されている。いずれにせよ具体的な沖縄戦の体験をリアルに学ばせるということに力点が置かれてきた。

しかし、これらの多様なとりくみにも関わらず、一方で平和学習のマンネリ化・形骸化を指摘する声がある。この原因について細かな分析は避けるが、学校現場によっては、毎年同じ内容のくり返しで子どもたちに「戦争は怖いものだ」という印象を与えているため、子どもたちが沖縄戦にふれることに生理的な嫌悪や恐怖感を抱かせているのではないか。そこには、「なぜ戦争が起きるのか」「なぜ住民が死ななければならなかったのか」という「沖縄戦の本質」「戦争の本質」を考えるプロセスがない。

このような中、子どもたちが沖縄戦に関する認識を深めていく手法として「劇」による表現を通じたとりくみがある。これまでも高校などを中心に平和集会の中で、劇やダンスなどの表現活動を通じた平和教育のとりくみが報告されてきた。小中学校においても、総合学習の時間等を活用しながら、地元の戦争を掘り起こし、自分たちで演じるというプロセスを通じて、沖縄戦をただ悲惨なものとして理解するのではなく、より具体的な地域理解を生み出し、沖縄戦下の住民の気持ちをリアルに考えるとりくみが行われている。

5.2 離島における平和教育の素材とその特徴

沖縄の離島には、さまざまな平和教育の素材がある。沖縄戦学習をすすめる上でも、島々によって沖縄戦の様子は大きくことになっている。そのため、子どもにリアルな沖縄戦認識をつくらせる上で、その地域の戦争体験を掘り起こし教材化していくことは非常に重要なことであると言える。

具体的に、2005年2月には、沖縄戦時離島の中で激戦となった伊江島の伊江小学校のとりくみがある。これは、阿波根昌鴻氏を中心とした戦後の土地闘争を父母の協力もあり劇化したものである。この劇を通じて子ども、父母、地域が伊江島の土地闘争の歴史を改めて考えるものとなっている。

また、八重山地方の波照間島では、軍による強制的な疎開命令により島民が西表島のマラリア有病地帯に移された。そのことで、多くの島民がマラリアに罹患し死亡した。沖縄戦では、必ずしも日米の地上戦闘に巻き込まれて死亡しただけではなく、日本軍による命令等により多くの離島の住民も犠牲となっている。波照間中学校及び、波照間島民の疎開先となった西表島の大原小学校では、強制疎開の事実を学んで劇として演じることで、郷土の歴史についての認識を深めている。

これらの活動を可能にするのは、沖縄県の各市町村ですすめられている「地域史」づくりのとりくみである。沖縄県下では、多くの市町村で地域史が編まれ、その中で「戦争編」または「住民の戦時体験記録」が発行されている。沖縄戦研究は、このような成果の上にたち、「民衆の沖縄戦体験」から沖縄戦の実相にせまる努力をすすめてきた。これらの成果に依拠しながら平和学習の教材化をすすめることが必要であり、西表島では城間良昭氏が「西表島の戦争」として西表地区教育研究集会で報告され、その後「西表島に戦争があった」として「田港朝昭編『4 沖縄戦と核基地』桐書房 1990 P.91」に掲載されている。

しかし、このような実践を積み重ねて行くには課題も存在する。それは、離島・へき地の学校の教員の任期は2～3年と短く、教師の教材研究の蓄積が学校の中になかなか残らないことである。地域素材や平和教育に興味関心を持ち、教材化が図られても、そ

の教材が蓄積されない状況があり、新しい教員が赴任するとまた一から教材研究を進めなければならないということが、地域学習の深化を困難なものとしている。

そこで、琉球大学教育学部と竹富町教育委員会（八重山諸島の町で、竹富島、小浜島、黒島、波照間島、西表島、鳩間島を含む島嶼地域の町である）では、地域教材のデータベース化をすすめ、毎年「結びあうしま島」CD-ROMとして発行してきた。これまでは、過去に竹富町内の小中学校に赴任した経験を持つ教員の実践記録の収集を中心に行い、地域素材を活かした劇のシナリオとビデオ、児童・生徒の調べ学習の成果などを、地域学習の素材として竹富町全体と共有し、活用しようというものである。これまで、2枚のCD-ROMが発行され竹富町内の小中学校に配布され、活用されつつある。

6. 教材IT化の一つの試みとしての「携帯deマッピング」

携帯電話の普及率は想像を超えるものがある。しかも、携帯電話は様々な便利な機能を有しているため、通信だけにとどまらず教育現場のツールとしても注目を集めている。これらの携帯電話を教育現場に利用する試みは以前から様々な方面で行われている。また、その利用方法も多様である。本研究では、携帯電話が持つ画像や動画を撮影するカメラ機能、これらの画像や動画付きのメールを送信する機能、GPS（全地球衛星測位システム）機能、電子ジャイロ（方位測定）機能などを使った教育補助ツールを開発した。このツールはWebGIS上に利用方法を展開したもので、携帯電話のカメラから撮影された写真や動画にGPS情報と電子ジャイロ情報を備え、電子地図の特定の場所に貼り付ける機能を完備している。著者等は携帯電話によるデジタル地図上のマッピングをする意味で、「携帯deマッピング」と名づけている。

6.1 WebGISとケータイについて

WebGISはWeb上に展開するGIS技術のことを意味する。そのためWebGIS上に展開する教育ツールはインターネット環境が備えられていることが前提である。今や日本の公立学校（小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、盲・ろう・養護学校）におけるインターネット普及率は97.9%¹⁾（平成14年3月31日現在）を超えており、WebGISによる教育ツールの環境は十分であるといえる。また、携帯電話の普及率は平2003年12月末現在、全国平均66.7%²⁾となっている。これは2002年現在に予想していた2007年度の65%の普及率³⁾をはるかに上回るものである。2001年9月に行われた徳島市教育委員会の調査結果によれば⁴⁾、調査した高校の女子の9割が、また小・中学生は2、3割が自分専用の携帯電話またはPHSを所持していることがわかっている。

6.2 完成したシステムの構成

「携帯deマッピング」は、GPSやカメラ撮影機能付き携帯電話から撮影した画像をコメント付きで特定のメールに情報を送信し、所定の地図上に送信された情報を登録する機能を有した、WebGISの教育ツールである。また、大きな特徴のひとつとして、一般的なGISの基本的機能に加え、地図上の地物やユーザが登録したいコンテンツに対して、時間情報を保持していることである。以下の図1にシステムの概要図を示す。

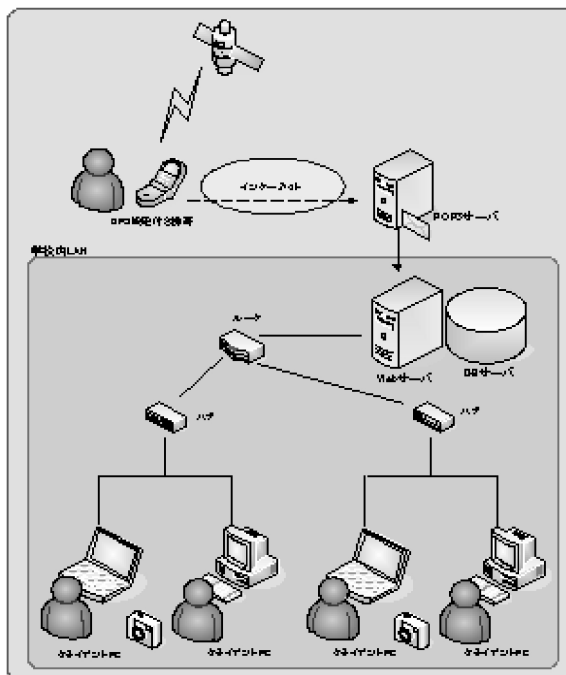


図1 「携帯deマッピング」のシステム構成図

本研究では地図表示のための GIS エンジンとしては J-STIMS 5 を採用した。理由は Web 用の J-STIMS エンジン (Web J-STIMS Ver2.0) が開発されたことと、これらのエンジンが教育機関においてはフリーソフトとなっているためである。また、このエンジンを利用することを前提に、昭文社の地図が無料で利用可能である。それだけではない。J-STIMS はエンジンの特徴として、時間管理が挙げられており、地図上のデータと時間を関係付けることにより、データベースやシミュレーション機能の可能性を秘めている。これは時間と積み重ねの繰り返しとなっている教育現場においては様々な可能性が生まれる貴重な機能であろう。また、データベースエンジンとしては MySQL を利用しており教育機関向けのフリー化を目指したものとなっている。

6.3 システムの特徴

現在のところ、「携帯 de マッピング」が採用したシステムの特徴としては、以下のように三つに大別される。

- ・ GPS 機能付きの携帯や、デジタルカメラで撮影した静止画像、またはデジタルビデオカメラで撮影した動画を地図上の撮影場所にコメント付きで登録することができる。
- ・ Web アプリケーションの特長であるクライアントの設定やメンテナンスをほとんど必要としないため、教材の準備、模範データの準備にも、時間を必要としない。
- ・ 地図上の地物の時間管理が可能であるため、地図上に静止画像、動画、PDF ファイルなどのデータをデジタルアーカイブとして登録することが可能である。

6.4 システムの機能

上記のシステムの特徴を生かしつつ、GISの機能を以下のように盛り込ませている。これらの機能はすべてWeb上で実現される。

- ・ 広域表示
- ・ 時間操作
- ・ レイヤ表示切替
- ・ 凡例表示
- ・ 表示縮尺
- ・ 拡大・縮小
- ・ 範囲拡大
- ・ 移動表示
- ・ UNDO
- ・ 距離計測・時間計測
- ・ コンテンツ登録
- ・ コンテンツ検索
- ・ GPS 携帯からの自動登録

6.5 システムの操作手順

システムの操作は大きく二つの手順に分けられる。一つは携帯電話からの操作であり、もう一つは「携帯 de マッピング」を起動してからの操作である。これらの操作については以下に示す。

- ・ 携帯電話からの操作（図2）

GPS機能付き携帯電話（NTT-DoCoMo F505iGPS）による現地確認。

- 即位レベル（可能な限り高精度のものとして設定）の確認と確定。
- 取得した位置情報のメール貼り付け。
- 題名のところにテキスト情報の入力。
- 宛先に特定のメールアドレスを入力。
- 画像を貼り付け機能を選択し、新規撮影で画像を取得。
- iショットで送信ボタンを選択。データ送信を行う。



図2 実験での使用機種と位置確認操作様子



図3 WebGISサイトのTopページ画面

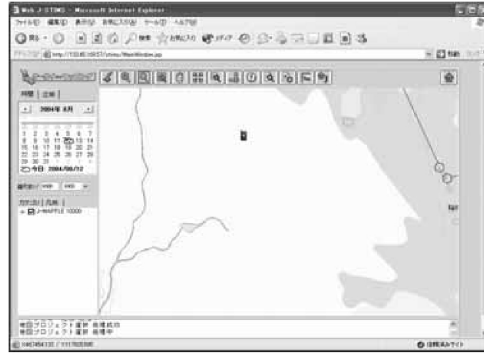


図4 選択された地図から得られる初期画面

・「携帯 de マッピング」からの操作

- MS の IE ブラウザを立ち上げる.
- <http://webgis.edu.nagasaki-u.ac.jp> に接続する. 図3のような上記のサイトのTopページが開かれる.
- 地図を選択し, 地図を開く. 最初の画面上に, 選択された地図の初期画面(図4)が開かれる.
- 携帯電話から送られた場所へ移動すると, 図5のように貼り付けられた情報が確認できる.
- それぞれの情報は図6のようにデータベース化され, サムネル画像から写真情報と動画情報, またはテキスト情報をマウス操作で確認できる.



図5 携帯からの情報を確認できる画面構成



図6 サムネル画像から詳細情報確認画面

6.6 「ケータイdeマッピング」システムの可能性

「携帯 de マッピング」は教育ツールとして様々な可能性を秘めている。特に、カメラを利用することにより自然観察の道具として利用可能であり、実物をデータとして残す勉強の道具として利用できる。また、これらのデータベースの機能を生かしたまとめ学習や観察データの整理、レポート作成のツールとしての効果がある。しかも、他人のデータを参照することができることからコミュニケーションや社会性につながるツールとも言えよう。長崎の平和・教育教材を作るうえでも IT 機材は一役できると信じている。

引用文献

- 1) 学校における情報教育の実態等に関する調査結果, 文部科学省初等中等教育局, 2002.
- 2) <http://www.shinetsu-bt.go.jp/sbt/hodo/h15/040217-5.htm>
- 3) <http://japan.cnet.com/news/com/story/0%2C2000047668%2C20059722%2C00.htm>
- 4) <http://www.tokutoku.org/children/ishiki.html>
- 5) <http://www.j-jikuu.com>